

源氏姫の夜泣き石

原田康法

むかし、また、この国でたゞきんの戦があつたら、交野といふ里に源氏姫と梅千代といふやぢらも母親と生きわかれた姫君と少年が暮つしていた。

ある年の暮れのこと、おち山といふ山にひそんでいた山賊が、源氏姫と梅千代の住んでいた村をおそつた。二人は、手足をしばられ、山賊のかしらであつた美しい女の前へつれてこられたが、梅千代は、おそわれた時につけた傷がもつて、すでに息絶えていた。

「あなたたちの名は、なんといふ？」

女の問いに、にくしみをこめて源氏姫が自分の名を言ひはなつと、女は、急に青ざめて手下の山賊たちを追いはらい、二人のなわをほどいてやつた。

「梅千代のかたき、覚悟！」

こゝろばかりに、源氏姫はつばいをつた短刀で女の胸をつきつけたが、女は、抵抗するでもなく、はげはらと涙をながした。

「ゆきておくれ、ゆるしておくれ。」

と、女は息も絶え絶えにさげんだ。どつどつとかと源氏姫が問つと、おちいたと、女は、「わたしがおまえたちの母親なのだ」と言った。

その語るところによれば、女は最初の夫との間に源氏姫をもつたが、夫は、戦で討ち死にし、二度目に嫁いだ先で梅千代を生んだが、二番目の夫も、やけ戦で亡くなつたのだつた。女は、家臣たちと

おち山へ立てこもり山賊となったが、逃げ遅れちゅうつで二人の子どもはぐれてしまったのだといふ。

女は、涙をこぼしながら息絶え、源氏姫は、悲しみのあまり一人のなきがらにすがりついてはげしく泣いた。そして、みずから短刀でのどをかき切った。

よそつようにして死んでいった二人の母子は、そのままひとつの石となり、それ以来、夜、人が近づくとかすかな泣き声が聞えるので、いつか「夜泣き石」と呼ばれるようになった。けれども、母子の亡くなった命

日だけは、同じ声が、母にまみれる子どもたちの笑い声に聞えるのだといふ。

源氏姫たちの夜泣き石は、今も、大阪の山中にひっそりとあって、人々の営みを見守っている。